

中国語の文の構造について

山 崎 淑 子*

The Structure of the Chinese Centence

Yoshiko Yamazaki

Through a comparison of the grammar of the Chinese and Japanese languages, I would like to draw conclusions about the special rules and structure of the Chinese language .In particular,I will focus on the unique structure and word order of the Chinese language,in an effort to help learners further their understanding through an analysis of grammatical components and their meanings.

一、前書き：

中日両国の政治、文化及び科学技術の広範なる交流が日増しに増加する中、中国語の勉強をしいてる方、勉強を希望している方は増加する一方です。いかにして速やかに且つ正確に中国語を身に付けたらいいかは多くの学習者の関心の問題となっています。日頃の中国語教学の中、学習者は、勉強する際、中国語の発音と語彙に対して、重点を置き、中国語の文の構造、即ち、文法の勉強を見逃してしまう傾向があるという気が致します。中国語は、発音はローマ字で表されそれに声調を付け、学習者は、大体は発音を見て発音でき、適当に綴れますが；語彙は辞書を調べれば全部載っていますので大変便利です。まして、「同種同文」の中日両国は、中国語の漢字は似通った所が多くて大体分かりますので、そんなに問題にならないのも実情です。中国語の発音と語彙は学習者にとってはヨーロッパ人よりこういった利点がありますので、勉強する意欲は湧くのです。しかし、一定年齢に達した成年者にとっては外国語を身に付けるのは話すこと聞くことだけでは、かなり上達しにくいと思います。言葉の構造規則を横に置いて、感性認識を頼りにし、理性認識を軽視するのは習っては忘れ、忘れては習うという形式のくりかえしになってしまいがちです。

外国語を習うことは、周りの言葉の環境がなくて、深くその場の生活の場面を体験できないという不利がありますので、本国で、単語の記憶と暗唱だけで、つい単調無味に流れ、勉強の

* 事務局

興味が薄くなって、最後は、放棄してしまうことになります。中国の「孫子兵法」に有名な文句「知己知彼，方能百战百胜」がありますが、“己を知り彼方を知ってこそ、百勝できる”ということで、又、中国の有名な指導者の毛沢東は物事に対する認識過程について、「認識、実践、再認識、再実践」、「要知道梨的味道，必須亲口尝尝梨的滋味。」、“梨の味を知りたいければ、この口で梨を味見してみなければなりません”と述べられました。物事を認識するに当たり、相手を熟知しなければなりません。中国語の勉強もこれに準ずるものなのです。中国語の言語の法則、文の構造の規則を重視し、深く、認識することは、効果を高め、回り道をしないで、早く目的地に辿り付くのです。殊更、もう子供でない成年者にとっては、感性認識より、理性認識のほうが合理的で、興味を湧かせてくれるのです。本文は、日頃の教学経験をすこしまとめ、文の構造と文の成分分析の角度から、中国語の文の構造規則と特徴を取り挙げてみたいと思います。

二、中国語の文の特徴：

言語は三要素があり、音韻、語彙、語法です。音韻学は発音、音調、方言などを研究するもので；語彙学は言葉と語彙の組み合わせと品詞の分類規則を研究するものです；語法学は言語の内部構造及び、語彙を文に作る規則を研究するものといわれます。全世界の言語はその言語が表現した特徴によって、3つの言語系統に分けられています。ヨーロッパ（英語を代表とする）言語は、屈折語に属し、文法現象は、主に、時、数、格などの変化といった形で表され；日本語は、膠着語に属し、文の構造は、「は、に、を、が」等の格助詞及び動詞の語尾変化によって表され、文法の研究対象は、一文節と他文節との相互関係です。一方、中国語は、孤立語に属し、文は独立した概念のある語彙が、一定の順序に並べられ、文法は構成成分の配列順序を研究対象とするものです。中国語では、英語のような、性、数、格、時の変化もなければ、日本語のような「は、に、を、が」など語の身分を示す標識的なものもないのです。中国語では単語は文の中に置かれる前後順序によって、その身分が表され、どれが主語か、どれが述語かと文を組み立てていくのです。語と語は相当に孤立し、ある概念を持ち、中国語の文の独特な点を成しています。配列順序が違うと、文の意味が変わるか、意味が通じないかになります。例えば、「我读书」（わたしは本をよむ）の順番をかえると、「我书读」、「书我读」となり、意味が通じなくなります。日本語の場合は「私は本をよむ、本を私はよむ」と順番をかえて、「本を」前にしても、後にしても、意味が変わりません。また、「私は本は読む」、「本は私は読む」と助詞が変わっても意味が通じます。また、「我们爱祖国」（私達は祖国を愛する）、これを「祖国爱我们」と順番をかえると、「祖国は私達を愛する」と、意味が逆になり、或は、「爱我们祖国」「祖国我们爱」は、もともとと言いませんので、正しい文とは言えないのです。ここから見ますと、中国語の文は構造が固定し、ルールがわりに厳格で、簡単に位置の交換はできな

いのです。たとえ時代の発展及び時代の必要に伴って、沢山の新しい単語が生まれたり、減びたりしても、文の組み合わせ、文を作る規則は比較的安定し、大きな変化が見つからないのです。特に新中国が成立以来、政府は「白話文を話そう」と提唱し、規範で身に付けやすい文を使用しようと唱えました。それで、現代中国語はいままでより通俗で、分かりやすくなりました。しかし、古代中国語は文の構造が複雑で、語彙の使用も現代中国語より分かりづらかったのです。例を挙げますと、「一農不耕，民或為之飢；一女不織，民或受之寒」。(農民は田を耕さないと、民はおなかのすくし、婦人は布を織らないと、民は寒さを凌げない)という意味です。現代中国語で表しますと、(农民不种地，人民就没有饭吃；妇女不织布，人民就没有衣服穿)となります。比べますと、現代中国語の方がずっと簡潔で、文の構造は分かりやすいのです。

さらに、ほかの国の言葉と比べると、中国語は漢字だけの連続で、単語の理解はさておいて文に対する理解はたいへん難しい点があります。この時、文はどこで切るか、主語はどこまでか、述語はどこからかと迷いやすいのです。たとえ句読点があっても、それは一つ一つの語・文の標識で、一つの意味のグループの中間ポーズで、文の意味の理解には影響が大きくないです。中国語は一つ一つの文ははっきりと、単独に並べて、日本語にある文中に文がある長い文はあまり見つかりません。よく日本語は、文が長く、読みづらい、新聞が中々読めないと訴えている声が聞こえますが、確かにそうだと思います。「，」は、文と文の繋ぎに使われ、「。」は、一つの意味を終え、文の結束を表します。多くの文は積み重なると、一つの文章になります。次の例文を見てみましょう：「是去还是不去，大家讨论了半天，还是没有结果。」(行くかいかないかは皆さんはだいぶ討論しましたが、やはり結果はありませんでした。)。ここは3つとも独立した中国語文で、問題の提起(主語)と、問題の解決(述語)の二つの部分から成ります。

三、中国語の文の構造分析：

中国語では、文のことは「句」と言い、単語を組み立てて、文にすることは「造句」と言います。文は、幾種類がありますが、語気上で分類しますと、述語文、疑問文、命令文、感嘆文があり、形式上で分類しますと、判断文、陳述文、形容詞文、存在文と分けられています。種類・形式色々あっても、文の構造は、一定の規則にそって表出されなければならないのです。種類がちがっていても、文の構造の型は一つです。このような型は私たちは「句型」と言います。中国語は「主語＋述語」といった構造は代表的なもので、最も典型的な文の型で、いわゆる「主述文」です。中国語で「主謂句」と言います。

次の例を見てみましょう：

- 1, 这 是一朵很美的花。 これは とても 綺麗なお花です。
- 2, 谁 来了? だれが 来た?

3, 你 先看一看 吧! どうぞ見てみてください。

4, 这首诗 写得 真不错! この詩歌は 本当に素晴らしい。

以上は、順番にそれぞれ、陳述文、疑問文、命令文、感嘆文に属しますが、文の構造はみんな一つのパターンで、即ち、いずれも「主語+述語」といったパターンです。「这、谁、你、这首诗」は主語と言ひ、ほかの部分は述語と言ひます。主語とは、文の主題で、話題の中心で陳述、説明される部分です。実詞はみんな主語に充てられますが、名詞、代名詞が特に主語に当たる時が多いです。主語は普通は述語の前にあります。述語とは主語について陳述・説明する部分です。動詞、形容詞、繫詞の「是」はよく述語をし、述語は普通は、主語の後に置きます。全文は「なにが、だれが」の部分は主語で、「どうだ、だれだ」の部分は述語です。中国語の主述文には、主語、述語の二つの成分のほかに、「賓語、定語、状語、補語」という文法の成分があります。主語、述語は主要で、他の四つは次元的なものです。木に譬えると、主語述語は根幹で、ほかは枝、葉で、根幹を飾って、それを一体化させるのです。次の文を見てみましょう：

5, (我) 妹妹 [去年] [在中国] 学了 <一年> 中文。

私の妹は、去年、中国で、一年間 中国語を勉強しました。

この「主述文」はすべての成分の揃っている文例です。「我妹妹」は主語で、後は述語です。但し、主語に連体修飾語即ち「定語」の「我」があり；述語には連用修飾語即ち「状語」の「去年」と「在中国」があり；さらに、述語「学了」の後に補語の「一年」と目的語即ち「賓語」の「中文」があり、動詞の述語を補足し、説明する成分です。中国語の「定語」は限定語の意味でよく名詞の主語、目的語の前に来、それらを限定・修飾します。このとき、中国語ではよく「的」を使い、日本語の「の」の意味です。「我的书」（私の本）「教室里的学生们」（教室の学生たち）「状語」は普通は述語の前に置き、動詞、形容詞を限定・説明する成分です。中国語では、副詞形容詞、時間名詞、介詞構造などは「状語」になります。「很高兴」（たいへん嬉しい）、「认真学习」（真面目に勉強します）、「去年,我去了海边」（去年、私は海へ行きました。）、「从上海来」（上海から来ました。）等はそうです。

文を分析する時に、分かりやすいため、私達はいつも“_____”で主語を表しますし、“_____”で述語を表します。_____で賓語を表しますし、[]で状語を表し、()で定語を表し、< >で補語を表します。通常その順番は：

定語+主語+状語+述語+補語+賓語

というふうに文の成分を並べます。

「主述文」の中の主語と述語は、全文に対して、言えるもので、全文の構造を対象として分析するので、気を付けて頂きたいです。例えば：

6、人们在过年、过节时常相互赠送名贵好酒 是为了表示孝敬、感谢、友谊等各种感情。

人々は、お正月、祝日の時によくお互いに、有名で貴重なよいお酒を贈るのが 親孝行、感謝、友情等のいろんな気持ちを表すためです。

7、「三国演义、水浒、红楼梦、西游记」等电视连续剧 人们都很喜欢。

「三国演義」、「水滸」、「紅樓夢」、「西遊記」などのテレビ連続ドラマは人々はみんな大変好きです。

中国語の文のパターンは、「主述文」のほかに、「無主文」、「一語文」等もありますが、数は少ないです。「無主文」とは主語が省略され、或は主語が必要のない場合です。例えば：「是他把书拿走了!」、(かれが本を持っていったのです。)、主語が省略される文は、よく会話の中にあります。例えば：「你去哪儿?」「去学校」。答えの文では主語の「我」が省略されました。文章の中も重複を避けるため、後の主語はよく省きます。一語文は「蛇!」(蛇だ!)、「信!」(手紙だ)といった一言だけの文す。古代中国語には、主述文にも助詞が使われたとみえますが今は使われなくなりました。例えば：「陈胜者，阳城人也；吴广者，阳夏人也。」(司馬遷・陳涉世家) (陳勝は陽城の者で、呉広は陽夏の者です。) ここの「者」、「也」は現代日本語の「～は～です」と同じです。次の文を見てみましょう：

- | | |
|------------------------------|---------------------|
| 1, <u>我 是中国人。</u> | 私は中国人です。 |
| 2, <u>今天 星期三。</u> | きょうは 水曜日です。 |
| 3, <u>他 是长城医院的医生。</u> | かれは 長城病院のお医者さんです。 |
| 4, <u>东京 是日本的首都。</u> | 東京は 日本首都です。 |
| 5, <u>富士山 很高。</u> | 富士山は 高いです。 |
| 6, <u>这件衣服 很贵, 那件衣服 很便宜。</u> | この服は値段が高く、その服は安いです。 |
| 7, <u>书包里 没有什么 东西。</u> | 鞆の中になにもありません。 |
| 8, <u>铅笔 在 桌子上。</u> | 鉛筆は 机の上にあります。 |
| 9, <u>他 捧着 书, 走进 教室里。</u> | 彼は 手に本を以て、教室に入りました。 |
| 10, [去年], <u>我去 外国 旅行了。</u> | 去年, 私は外国へ旅行に行きました。 |

1-4は、いずれも判断文です。2は繫詞「是」の省略された文で、日付、出身地、特徴などの判断文はよく省略してもいいですが、3、4は定語の伴っている長い述語の例です。この場合主述文が述語になるときも主語になるときもあります。

11, 茅台酒 是深受国内外人们喜爱的好酒。

マオタイ酒は深く国内外の人々に愛されるいいお酒です。

12, 晚餐 适量地饮点酒 可以养生。

晩ご飯は適量にお酒を飲むことは 養生にいいです。

前の5、6は形容詞文で、述語は形容詞で、前によく副詞を使って、状語の成分として限定説明されます。7、8は存在文の例で、中国語では普通に「有、在」を使い、人、物の存在を表します。「～に～がある」のときに、「有」を使い、「～が～にある」のときは「在」を使います。例えば：

13, 铅笔在书包里。 鉛筆は 鞆の中にあります。

14, 书包里有铅笔。 鞆の中に 鉛筆があります。

前文の9、10は動詞の叙述文で、9は連動文といい、幾つの動詞は連続して一つの主語を共有するのです。ほかの例を見ると、「我每天早上六点起床，漱口，洗脸，看报纸，然后吃饭。」（私は毎朝六時に起き、歯を磨いて、顔を洗って、新聞を読んで、それから朝ご飯を食べます。）10は述語の「去」は二つの目的語を伴い、いずれは「去」と関連する者です。二つの目的語が付いている文に「兼語文」というのもありますが、例えば：

15, 我教他学汉语。 私は かれに 中国語を教える

16, 他叫我听广播。 かれは 私に ラジオを聞くようと言いました。

文の順番では、日本語と違う所は中国語の文は動詞、介詞を先に置き、目的語は後に来ます。また、補語は動詞の後に置かれます。たとえ「を、が、で、に」に相当する表現でも同じです。例えば：「有水」（水がある）、「刮风」（風がふく）、「来客人了」（お客さんが来ました）「学中文」（中国語を習う）、「写在这儿」（ここに書く）、「在公司工作」（会社で働く）、「买了三枝铅笔」（鉛筆三本買った）、「写得很清楚」（はっきりに書いた）などを見れば、お分かりだと思いますが、連体・連用修飾語・主語等は、中国語と日本語は、順番は同じです。

次の文を見てみましょう：

1, 桃花谢了, 樱花〔就要〕开了。 桃の花が散ったら、桜の花がいよいよ咲きます。

2, 风停了, 雨住了, 太阳出来了。 風がとまって、雨がやんで、日が出ました。

3, 北京我没去过; 上海我去过。 北京は 私は 行ったことがありませんが、上海は 私は行ったことがあります。

4, 九是三的三倍。 九は三の三倍だ

5, (电话) 一个是从市内打来的, 一个是从市外打来的。 電話は 一本は市内からかかってき、一本は市外からかかってきたのです。

6, 说说容易, 做起来难。 言うのは易しいが、やるのは難しいです。

7, 勤劳使人聪明。 勤勉は 人の頭をよくする。

以上の例文では1、2文は主述文の並列な並列複文といって、3番で北京、上海は主語で、

後は主述文が述語になる例ですが、この場合、目的語の前置と中国語では理解はしないのです。4、5は数詞、数量詞が主語になる例で、6、7は動詞、形容詞が主語になる例です。日本語では形式体言「こと・もの・の」を使い、それらを名詞化させ、中国語では、動詞、形容詞が直接主語になることがあります。

以上は、お分かりのように、文中に語の成分を表す標識がないので、どこが主語か、どこが述語かは分かりがたいときがあります。学生に次の文を訳させるとき、次のような答えがありました：

1, 中国的云南省会昆明 称为“四季如春”。

- a、中国の雲南省の都会には昆明があって、四季の中、春が一番いいです。
- b、中国には、雲南は都会で、昆明は 四季が春のようだとされている。
- c、中国の雲南省の都会は昆明と言い、四季は春です。
- d、中国の雲南省の都会は一年中春で、昆明とされている。

2, 中国的儒教 主张 男尊女卑, 夫唱妇随。

- a、中国の儒教が主張したのは、男尊女卑、夫唱婦随です。
- b、中国の儒教は男尊女卑を夫唱婦随と主張している。
- c、中国の儒教が主張した男尊女卑、夫唱婦随です。

例1は「昆明」までが主語で、「称为」は述語です。「四季如春」は目的語です。意味は「中国の雲南省の都会の昆明は四季春のようだとされています」。例2は「中国的儒教」は主語で「主张」は述語で、後の部分は目的語です。

以上の例は文の仕組みに対し、主語・述語はどこで切るか迷ってしまうケースです。中国語の文を理解するとき、文を作る時に、学生にとっては、これは一つの難点だと思います。さらに、中国語の主述文には他動詞も自動詞も目的語を後続することが出来ます。例えば：

- 1, 前面 来了 一辆车。 前から一台の車がやってきました。
- 2, 班里 [又] 走了 一个同学。 クラスは また一人の学生が 転校していきました。
- 3, [怎么] [又] 多了 一口锅呢? なぜ また一つ 鍋が 多いですか。

ここでは、「一辆车」、「一个同学」、「一口锅」は日本語では、行為する主体で、主語と見なされますが、中国語では、それらは、目的語の「賓語」となるので、日本語の文節と文節との関係を論じると違って、中国語は文の構造を論じることが多いです。さて、「一辆车来了!」、「一个同学走了。」、「一口锅多了」はどうでしょう。これは話し手は客観事実を述べて、例1、2、3は主観意識を述べ、語義上の問題で、文の構造上はなにも問題はないのです。

日本語では、自動詞は目的語をとりません、「会議が始まった」は「会議を始めた。」と言わないのです。そして、中国語では介詞即ち前置詞は目的語を後続できます。「从北京来」(北京から来る)、「在这儿」(ここにいる)、「到上海」(上海までいく)、「比海深」(海より深い)、「对他说」(彼に言った)等「に、から、まで、より」は前置して、後に目的語を後続させるのです。ここも注意していただきたいところです。

次は、中国の有名な劇作家の老舎の「老張的哲学」の中の文を選んで、中国語の文の構造と特長をちょっと見ていただきたいです：

- 1, (你盟兄) 李五〔才〕给我 一个电话。
お宅の兄貴の李五から、只今お電話がありました。
- 2, 〔快〕准备! 早く準備しろ!
- 3, 我们 不怕 他们文面上的, 〔可也〕不必 故意冷淡了他们。
私達は、役人が怖くないが、しいて、冷たくあしらうこともない。
- 4, 老张自己 冷静了〔几秒钟〕、把 脑中几十年的经验〔匆匆的〕读了〔一遍〕。
張さんは数秒間、自分を落ち着かせて、頭に数十年の経験を一通り掠めさせました。
- 5, 拿书的 拿书, 扫地的 扫地, 擦脸的 擦脸……
テキストを出すもの、ほうきで はくもの、顔をふいてやるもの
- 6, 王德 提着 扫帚 跑进来, 把 字典 递给 老张。
王徳はほうきを持ったまま走りこんできて、自分の辞書を張さんにわたした。
- 7, 不是我有意、是树上落下来的; 我 一抬头, 〔正〕落在 我嘴里。不是有心, 老师。
食べようと思って食べたんじゃない。木から落ちてきたんです。
上を向いたら、ちょうど、口の中へ入ってたんです。わざとじゃないです。
先生。
- 8, 孙八爷〔看着〕有 四十上下的年纪, 矮矮的身量, 圆圆的脸。
孫八爺は見たところ、四十才前後で、背は低く、丸顔であった。

ここで、気を付けていただきたいのは、4と6は処置文といって、中国語では「把」を前に置いて、後に他動詞を使います。これは中国語の文の独特な特徴の一つで、よく処置詞「把」を使い、処置できることを指します。日本語の「を」に当たり、目的語の前置とは言いません。

7番は、前半は主語の省略された文です。

学生は次の文を中国語に直す時に、語順はどう並べたらいいか、分からなくてよく戸惑います：

1, 你能用中文从一数到一百吗?

これを訳す時、まず、主語、述語をさがし、それから限定説明と補助部分を見付け出します。全文は主述文で、主語「你」、述語は能願動詞「能」で、「できる」「・・・られる」という意味です；後はみんな述語「能」の目的語を見なしていいです。目的語の中に、動詞「数」の前に「用中文」と「从一」の二つの介詞構造に連用修飾されます。補語「到一百」は、「数」の結果を表します。“あなたは中国語で、一から百まで、数えることができますか。”という意味です。

さて、「象は鼻が長い」という主述述語文はどうでしょう。中国語では、これは、主述文のもう一つの表現だとみられ、主述文が全文の述語になり、主語を補助、説明します。

2, 他 一口水也 不喝 。 かれは一口の水も飲みません。

3, 这件事 大家都 赞成 。 この事は 皆さんは 全員で 賛成します。

4, 他 态度 和蔼 。 かれは 態度が いいです。

四、終わり：

言語は、いつもある特定の言語環境の中に置かれて、一定なる意味を表します。文は簡単で、分かりやすいのもあり、複雑で分かりにくいものもあります。以上は文の構造、文の文析といった文の法則の角度から、中国語の文について述べました。前書きにも申し上げたように、いずれの文もその表現規則がありますので、文の主要成分を立体化させ、そのまわりに敷かれてある補助成分を理解し、難文でも、平面的なものより、立体的に変わり、分かりやすくなってくると思います。ある文法の本は、一語文も「文」と定義しますが、「蛇！」「信！」（蛇だ！）（手紙だ）これは、単なる一字の単語ですが、文と理解されるのは、言語の環境が脳裏にすぐ、「蛇がいる」「手紙がきた」と映り、特定の環境があるのです。言語は、社会、生活を反映するもので、いつもその環境と緊密に結び付くのです。社会、生活を離れた言語は結局存在しないのです。中国語を勉強する際、文の構造を理解し、正しい順番によって文を組み立て、交流がスムーズに出来るようになるのが、言語学習の基本点でしょう。綺麗な発音はもちろん重要ですが、順番転倒、意味不明な文を言うと、人に不愉快な感情を与え、交流の目的を達することが出来ないのです。

参考書：現代漢語
現代漢語
中国語基礎知識
中国語初級
《中国語》

黄伯荣 廖序东
胡裕树
香坂順一
堀黎美 山崎淑子
97年7月

(平成10年12月3日受理)